

令和7年度 地域循環共生圏づくり支援体制構築事業 実施計画書（継続団体用）

活動団体の活動におけるテーマ

『 豊かな自然と地域の宝を未来へつなぐ旅

“ビー ジー サス・ジャーニー”

Blue-Green-Sustainable Journey

持続可能な観光プラットフォーム構築

』

活動団体の活動地域：岩手県 釜石市

活動団体名：株式会社かまいしDMC



中間支援主体名：一般社団法人ゴジヨる



参加団体の基本情報

(1) 活動団体の基本情報

団体名	株式会社かまいしDMC
活動地域	岩手県 釜石市
専門性・強み	
サステナブルツーリズム推進 地域資源の魅力発信 自然体験プログラム開発 企業研修プログラム開発 東日本大震災の復興と地域創生 地域拠点としてのキャンプ場の運営 住民との協働	

団体概要
【地域創生事業部 “根浜シーサイド”】 ・活動エリア：釜石市の鵜住居・片岸・根浜・箱崎 ・事業：施設管理企画運営、プログラム企画実施、 地域産品プロデュース、地域創生活動他 ・ミッション： 観光地域づくり法人として、地域の観光資源及び 産品の魅力を最大限引き出し、地域経済を活性化、 住まう誇りを醸成すること

(2) 中間支援主体の基本情報

団体名	一般社団法人ゴジョる
活動地域	岩手県 釜石市
専門性・強み	
#持続可能な地域事業モデル #分野横断型の協働 #多セクター連携の推進 #未利用資源の有効活用 #企業連携による販路構築 #ソーシャルインクルージョンの実践 #林業と福祉の連携事業	

団体概要
・事業： 社会福祉事業、地域商材販売事業、林福連携事業 ・ミッション： 東日本大震災で甚大な被害を受けた被災地の持続可能性の向上のため、地域の課題を連携・協働で解決を促す

地域の紹介

【鵜住居・根浜エリア】

美しい砂浜に面し、海山川が交わり、そこに住む漁村住民と漁業文化が息づく自然文化の豊かな地域で、釜石の漁村観光と体験ツーリズムを支えてきた。

東日本大震災の大津波を経験後、地域では自然と景観を守るなどのため、防潮堤を低く保持し、住民が海に見える高台へ移転。さらに、壊れた環境の復旧と保全を行うなどの取組が積極的に起こり、さまざまな活動が課題に直面しながらも継続されている。体験活動は根浜シーサイドを中心に継続的に行っている。



活動団体と地域の紹介

【根浜シーサイド ～釜石市 自然とつなぐ公共施設～】

- ・「豊かな海山川という自然環境と文化の中で、自然と人、
人と人、自然と人とスポーツを結ぶ、学びの体験施設」
- ・ 東日本大震災の大津波から再生された観光施設
- ・ 「三陸ジオパーク」「三陸復興国立公園」「みちのく潮風トレイル」交流拠点
- ・ 地域に見守られ、地域と共に歩むキャンプ場、地域活動の拠点
- ・ 持続可能性と環境共生を軸に取り組む



活動団体の目指す地域の姿

地域循環共生圏の構築を通じてありたい地域の姿

～ここを訪れたい・つながりたい・まなびたい・仲間になりたい・持続可能な地域～

それぞれの活動チームがゆるやかな連携をとりながら、つながりあい、根浜全体の地域の魅力を作りあげ、外から訪れた人々がそれらの魅力を体験できる環境がととのい、心の仲間が増えていくこと。

またその結果、つながりの中で経済の循環が生み出されること。持続可能性の体験をクリエイト！

地域に必要なプラットフォームの体制や仕組み ローカルSDGs事業として取り組む内容

■ かまいしDMC(根浜シーサイド)=環境x観光
プラットフォームの総合プロデューサー

■ 地域の活動団体・事業者・住民

- ・ ゆるやかな&好つながり保持
- ・ 全体で鵜住居&根浜の魅力につなげ、
活性化していく想いを共有する
- ・ 地域の経済循環に向けて協働
- ・ ボランティアガイドなど住民参加の促進

環境 x 観光 x ○ ○ の事業タネづくり

- ・ 各団体の活動、提供価値の見える化
- ・ 環境・観光コンテンツの価値の認識と共有
- ・ 地域内外つながり創生(誘客施策・情報発信)

【生物多様性】自然体験イベントや講習会

【教育】環境教育プログラム考案

【福祉】障がい者旅行のためのユニバーサルビ
ーチとキャンプ場の整備検討

などに取り組む。

地域の現状

【課題】

- ・ 良い活動だが担い手が増やせていない、活動が活発にならない、資金が作れない...という悪循環
- ・ 「持続可能な観光のフロントランナー釜石」「ストーリー性のある根浜」を活かしきれてない
- ・ 交流人口に対して、地域の良さが活かされてない、見える化できてない
- ・ つながれる仕組みやツールが整ってない、第二の故郷になるには
- ・ 「隠れた魅力」状態である地域の魅力をもっとピーアールする必要がある

現時点のマンダラ



<UNEHAKEの由来>

釜石市の地名から

うのすまい

ねばま

はこざき

【ありたい未来】
環境・地域住民や活動団体・利用客・地域経済
全てにとって持続可能な地域

「地域の宝ものをつなぎ
自然と共生するUNEHAKE」(仮)

【成果】

ゆるやかなつながりをもつ
地域のプラットフォームの
基盤づくり

水面下にあった
プログラムの磨き上げ

環境・生物に関する
体験教育プログラムの造成

市の観光コンテンツとの
連携の足がかり

【課題】

人材と連携

地域住民の参加率 地域住民の連携
担い手不足(若手・中堅) 団体間の連携
団体間の情報共有

経済面

地域のシンボルがない 地域にお金落ちる
仕組みがない
活動団体のマネタイズ 緊閉差が激しい

環境面

海洋環境の変化 野生動物との距離
ユニバーサルなインフラ整備

【取り組み】

SH-MTGの開催

受け入れのための環境整備

ヒアリング・アンケートの実
施と現状把握

インバウンド誘致における
情報収集

観光HPとの連携検討

名称(仮)の作成

プログラム(蒸留体験、ピクト
観察会)の試験的实施

教育機関との連携を通じたプ
ログラムの実施

【地域資源】

文化とつながり

防災ストーリー マリンスポーツ 根浜のファン
の歴史
三陸ジオパーク みちのく潮風 ラグビー文化
トレイル

経済面

シンボルとなりうる キャンプ場 自然の恵みによる文化
(漁村文化、薪など)
宿泊施設の バリエーションが豊富

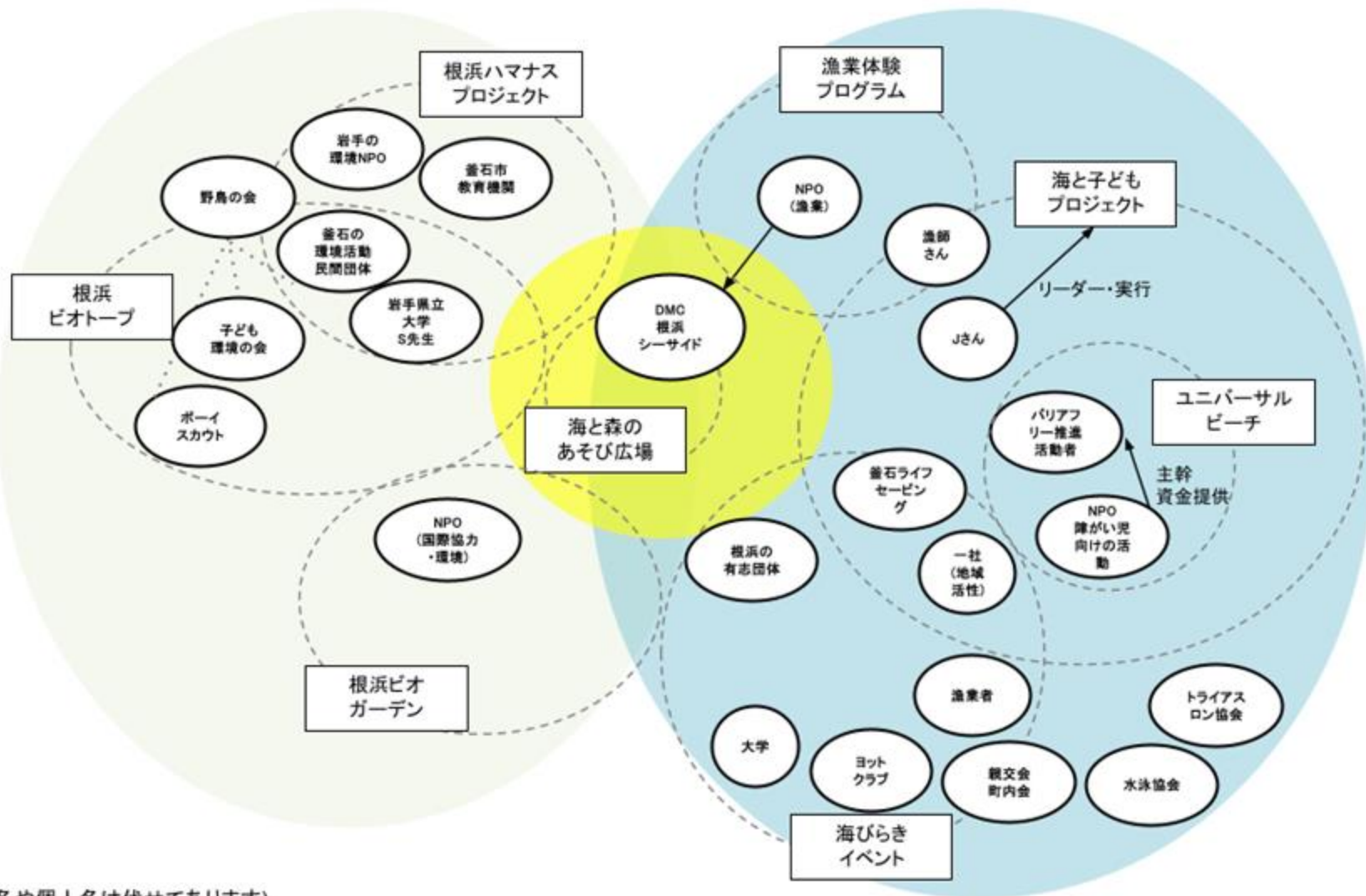
環境面

自然資源 (海、砂浜、芝生、松林など) 温暖な気候
風景 (日本百名月、白砂青松100選)

UNEHAKEは、釜石市の鶴住居町・根浜地区・箱崎町のエリアにおける活動団体や活動者、根浜シーサイドが連携するなどして共に取り組むために、根浜シーサイドが創った仮のグループ名です。

“地域プラットフォーム”のイメージ

現時点での体制



(団体名や個人名は伏せてあります)

3カ年状態目標

■ 2026年度末の状態目標

【環境x観光プラットフォーム構築の実装】

- ・ 仲間と協力しながら、体験ツアーなどのプログラム実施 (目標: 企業・教育機関 5つを新規開拓)
- ・ 訪問者数を増やし(2023年比で150%)、地域経済が循環する仕組みをつくる
- ・ 各団体の持続可能性、経済性を高めるサポートを行っている
- ・ 観光客および地域住民のウェルビーイングのための環境整備に取り組む

■ 2025年度末の状態目標

【地域ビジョン実現のための体制づくり】

- ・ 仲間とつながる情報共有やコミュニケーションの仕組み作り
- ・ 釜石市の地域観光ビジョンと計画に沿った事業を試験的に行う
- ・ 環境x観光プラットフォーム構築における、各々の役割を設定している
- ・ 事業立ち上げのための環境整備、ボランティアガイド育成準備に取り組む

■ 2024年度末の状態目標と振り返り

【基盤の整備】を軸に、複数団体との関係強化や、地域ビジョンおよび事業のタネの考案に重点を置いて取り組んだ。

- ・ 仲間探し：18団体とのSH-MTGを実施し、事業主体メンバーを構成する基礎ができた。
- ・ ビジョン：仲間の地域への想いや課題を確認した。ビジョンの更なるブラッシュアップが必要。
- ・ 事業考案：複数団体との協議や行事を通してタネを考案。2025年は事業化に向けて進めたい。

中間支援主体のありたい姿

■ 中間支援主体としての獲得目標

- ・ 伴走型支援の深化：活動団体の変化を促す効果的な支援手法の幅を広げたい
- ・ 活動団体の主体性を引き出す支援力の強化：重要度の認識やモチベーションなど心理的な支援手法を獲得したい
- ・ ネットワークの活用と拡大：EPO東北との連携をはじめとして、他団体とのつながりを促進したい
- ・ データ活用や見える化の支援：課題やありたい姿を見える化させて、活動団体およびその先の関係者にとって説得力のある提案や助言を行いたい

■ 中間支援主体としての本事業終了後の地域づくりへの貢献

本事業を通じて培った伴走型支援のスキル、活動団体の主体性を引き出す心理的な支援手法、さらにネットワーク構築とデータ活用の経験を活かし、地域の多様な主体がつながり、協働できる土壌を整備していく。

また、地域循環共生圏の考え方を基盤に、環境・観光・教育など複数分野の活動を横断的に捉え、それぞれの取り組みが相互に補完し合う関係性を築く支援を行うことで、地域内に持続可能な連携の仕組みを根づかせる。

将来的には、地域内外をつなぐハブとして、他地域の成功事例や政策との接続も図りながら、共生圏づくりの広がりや深化に貢献していく。

中間支援主体の支援・取組計画

■ 中間支援主体の1年間の支援目標

中間支援主体として、活動団体が環境課題を「自分ごと」として捉え、地域住民やステークホルダーへ行動変容を促す力を高めることを目指す。そのために、環境に関する基礎知識や政策、共生圏の考え方（マンダラや他地域の事例）を共有し、団体自身がそれを活用できるよう支援する。1年後には、活動団体が自らの活動の意義を再整理し、環境プログラムの実施や情報発信を通して、地域内に波及的な学びと対話の機会を生み出している状態を目指す。

■ 支援計画

	活動団体の取組における現状と課題 (見立て)	課題を解決するために必要と考える手段 (打ち手)
①	活動団体が2024年度に描いたビジョンの解像度をより高めて、且つ、地域の関係者が共感できるビジョンとして作り上げる必要がある。草の根活動をする団体の多くが「自分たちの活動が地域や環境にどのようなインパクトを与えているか」の言語化が十分ではないため、外部に伝わりにくい状況である。	地域の関係者との対話の場を積極的に設け、なぜそのビジョンが必要か、どのような未来像なのかを一緒に問い直しながら、言語化と共有を進める。その際、マンダラやマップなどのツールを活用する、アイコンを作るなど、視覚的に理解・共感できるようにする。
②	事業のタネからの事業構築をする際に、共生圏の理解をさらに深め、先進事例から学ぶ必要がある。そして、環境基本法、自治体の総合計画であるサステナブルツーリズムを踏まえた事業にすることが重要。	自治体の施策や計画と照らし合わせながら、地域内のリソースを活用したプログラム案を企画・整理する機会をつくる。必要に応じてEPO、専門家、他の地域の活動団体とつながり、事業内容をブラッシュアップしていく。
③	事業の実施主体や応援してくれる主体を探すために、活動団体が主体性を発揮して、自らの役割や意義を再確認しながら、関係者と共に連携体制を築いていく必要がある。	関係者に「自分たちが担う役割」や「取り組みの意義」を再認識してもらえよう、課題・強み・目指す姿を可視化するワークや共有の場を設ける。さらに、役割分担や連携体制を話し合える場を設け、事業主体を巻き込みながら、ネットワークづくりを後押しする。

活動・支援スケジュール

■スケジュール



備考（補足説明など必要な場合は記載）